

# 複文の従属節における主語省略について

## —「カラ」節を中心に—

付 改 華

### Abstract

This paper focuses on the omitted subjects of the 'kara' subordinate clause in Japanese, and aims to make it clear what kind of ellipsis-principle can be applied to the sentences, by closely observing the intra-sentential, discoursal, and situational contexts.

By indentifying the referent of omitted subjects, it has been found that there are four patterns of the missing-subject constructions in the 'kara' subordinate clause which are called the "main-clause-theme coreference" model, the "precedent-topic coreference" model, the "speaker / hearer coreference" model, and the "no coreferential element" model.

It has turned out that the referent of the subject in a subordinate clause will be easy to be omitted in coreferentiality with the main clause theme or with the element which can easily agree with the speaker's viewpoint on in the context. On the other hand, if the subject in a subordinate clause is a part of new information or focal information, it will be hard to be omitted. Moreover, apart from this, when omitting the subordinate-clause subject may invite vagueness, the subject must exist explicitly.

キーワード……「カラ」節 一致要素 主語省略パターン 省略条件 主題 情報

### 0. はじめに

複文における主語の省略は節類型と緊密に関わっていることが盛んに議論されている（南（1974）、益岡（1997）、野田・益岡・佐久間・田窪（2002）、成山（2009）など）。それぞれの研究で、しばしば指摘されているのは、「ながら」を代表とする接続助詞を使っている複文では、従属節の主語は常に主節主題と同一指示になるため、省略されるが、「カラ」を代表とする接続助詞を使っている複文では、事情が複雑であるということである。次の例を考えてみよう。

- (1) a. [ $\phi_i$ それを見ながら] 彼<sub>i</sub>は、少年の暗い目を思い出していた。 (『白夜行』)  
 b. \* [ $\phi_j$ それを見ながら] 彼<sub>i</sub>は、少年の暗い目を思い出していた。

- (2) a. あの子<sub>i</sub>は〔 $\phi_i$ 音楽部の部長をしてたから〕、いつも居残りをして……  
(『白夜行』)
- b. 〔 $\phi_j$ また今度来るに違いないから〕、 $\phi_i$ その時まで預かっておこわ。  
(「地方紙を買う女」(益岡 1997))
- c. 〔お父ちゃん<sub>j</sub>が帰ってけえへんから〕、 $\phi_i$ 心配したやろな。  
(『白夜行』)

(1) では、a、b どちらも「ながら」を使っている。しかし、(1a) は従属節で省略された主語は主節主題と同一指示と見なされて省略されているが、(1b) のように主節主題を指し示していない従属節の主語省略は許容されない。一方、(2) では、(2a) は従属節で省略された主語が主節主題の指示対象を指し示すこともあれば、(2b) のようなお互いに異なる主語<sup>1</sup>が省略されることも許容される。また、(1) とかなり違っているのは (2c) の例である。(2c) では、主節の主語が省略されているが、従属節では主語が省略されていない。しかも、その省略された主節主語と省略されていない従属節主語はお互いに同一指示にならないことに注意しておきたい。

本稿は、状況が複雑な「カラ」節を中心に、従属節における主語省略のパターンを考察し、それぞれの主語省略の条件を求める。

## 1. 先行研究

従属節における主語の省略と非省略の問題は、数多くの研究者によって検討されている。例えば、久野（1978）では、複文における主題省略について2つの原理が提唱された。野田・益岡・佐久間・田窪（2002）では、単文の主格<sup>2</sup>選択の原則が指摘された上で、複文における主節及び従属節の主格選択の原則が提案された。それぞれの先行研究によって、複文における主語省略はある程度解明されたが、まだ不十分、または不適切な点がある。それでは、それぞれの先行研究を検討しよう。

### 1.1 久野（1978）の研究

複文中の主題省略について、久野（1978）は二つの原理を提唱した。1つ目の原理は次の(3)のように述べられている。

- (3) 従属文（本稿でいう従属節）の主語と文全体の主題とが同じ時、前者を残して後者のみを省略することは難しい。  
(久野 1978: 116)

次の(4)は原理(3)が適用される例である。(4)では、(4a)のように文全体の主題としての「太郎」を省略すれば不資格になるが、(4b)、(4c)のように従属節の主語としての「太

郎」が省略されると適格になる。

- (4) a. \*太郎<sub>i</sub>ガ病気ナノニ、φ<sub>i</sub>学校ヲ休モウトシナイ。
- b. φ<sub>i</sub>病気ナノニ、太郎<sub>i</sub>ハ学校ヲ休モウトシナイ。
- c. 太郎<sub>i</sub>ハ、φ<sub>i</sub>病気ナノニ、学校ヲ休モウトシナイ。

(久野 1978 : 115)

2 つ目の原理は次の (5) のように述べられている。

- (5) 「Y ガ……X……、X ハ……。」の主題「X ハ」の省略は、次の二条件の何れかが充たされた時のみ可能である。

- (i) 文全体が、X 寄りの視点<sup>3</sup>からの記述であり ( $E(X) > E(Y)$ )、尚かつ X が先行文脈の主題であることが明確な場合。
- (ii) 話者が完全に自己を Y と同一視化し ( $E(Y) = 1$ )、主文も、Y の視点から見た X に関する記述である場合。

(久野 1978 : 122)

(5) の (i) が適用される典型的な例は、次の (6) である。

- (6) 太郎ガ僕ニ会イニ来タケレドモ、[僕ハ]会ッテヤラナカッタ。 (久野 1978 : 118)

(6) では、文全体が、話し手の「僕」寄りの視点からの記述であり ( $E(\text{僕}) > E(\text{太郎})$ )、主文の「僕ハ」が省略されても、適格な文である。

(5) の (ii) が適用される典型的な例は、次の (7) である。

- (7) 太郎ガ花子の家ニ行ッテ見ルト、[花子ハ]丁度買物カラ帰ッテ来タ処デアッタ。

(久野 1978 : 119)

(7) は、「Y ガ……X……、X ハ……。」の構文であり、かつ「過去の出来事を表す「…ト」構文が用いられている場合には、文が従属文の主語の視点からの記述であることが更にはっきりする」(久野 1978 : 120) という条件が当てはまる場合である。したがって、話し手が完全に自己を「太郎」と同一視化し ( $E(\text{太郎}) = 1$ )、主節も、太郎の視点から見た「花子」に関する記述になっている。すなわち、(7) は (5) の (ii) が適用される例である。この場合、「花子ハ」が省略されても適格である。

以上のような久野（1978）の研究、とりわけ視点という分析概念によって省略条件を検討することは、日本語の省略現象の研究にとってきわめて示唆的である。しかし、久野（1978）の研究の中心は主節主題の省略であり、従属節における主語の省略については、1つ目の原理（3）で言及されているものの、まだ不十分である。例えば、本章の冒頭で挙げた（1a）、（1b）、（2a）はすべて久野（1978）の原理（3）が適用されるが、（2b）は原理（3）によっては説明がつかない。（2b）に適用される原理は未だ明らかではない。

## 1.2 野田・益岡・佐久間・田窪（2002）の研究

野田・益岡・佐久間・田窪（2002）では、単文の主格選択の原則が指摘された上で、複文における主節及び従属節の主格選択の原則が提案されている。

### 1.2.1 単文での主格選択の原則

野田・益岡・佐久間・田窪（2002）では、単文での主格選択の原則として、（8）が述べられている。

（8）単文での主格選択の原則（野田・益岡・佐久間・田窪 2002：55）

原則1 動作を行うほうを主格にする。

原則2 話し手に近いほうを主格にする。

原則1は、動作を行うほうと動作を受けるほうがあるときに、動作を行うほうを主格にするということである。例えば、次の（9）と（10）では、（9）の方がよく使われる。

（9）野村が上田に声をかけた。 （野田・益岡・佐久間・田窪 2002：55）

（10）上田が野村に声をかけられた。 （野田・益岡・佐久間・田窪 2002：55）

原則2は話し手に近いほうと話し手から遠いほうでは、話し手に近いほうを主格にするということである。例えば、次の（11）と（12）を見てみよう。

（11）a. 私は野村に声をかけられた。

b. 野村は私に声をかけた。

（野田・益岡・佐久間・田窪 2002：55）

（11）のa、bでは、話し手を指し示している「私は」が主格にしている（11a）のほうがよく使われる。（（11a）の「私は」と（11b）の「野村は」は、主格が主題になっている例である。

特に「私」は主題になりやすいので、主題になっている例を示すが、ここで問題にしているのは「私は」や「野村は」が主格だということである（野田・益岡・佐久間・田窪 2002：55）。

### 1.2.2 複文での主格選択の原則

複文では、主格の選択が単文とは違うところがある。まず、主文（本稿でいう主節と同じである）のほうの主格は基本的に単文と同じである。すなわち、複文の主節の主格選択の原則は単文の場合と同じく、次のようになっている。

原則1 動作を行うほうを主格にする。

原則2 話し手に近いほうを主格にする。

（野田・益岡・佐久間・田窪 2002：55）

例えば、次の複文の主節における主格を見てみよう。

(12) 太郎は、あれを買いたいとノートパソコンを指さした。

(13) 母が病気になったため、旅行を中止した。

(14) あの人たちは私達に見守られながら今まで自力でやってきた。

（野田・益岡・佐久間・田窪 2002）

ただし、主節が過去形になっている「～と…」や「～たら」の主節の場合だけは、原則1、2から外れるとされている。次の(15a)のように、従属節の主格と主節の主格が違うときは、主節の主格が「私」以外のものでなければならないからである。従って、(15b)のように、主節の主格が「私」だと、非常に不自然になる。

(15) a. 私が彼に話しかけようとする、彼はあわてて立ち上がった。

b. \*彼が私に話しかけようとする、私はあわてて立ち上がった。

（野田・益岡・佐久間・田窪 2002：56）

例外とされているこのずれは一見して(7)と同じ問題になると思われる。つまり、久野(1978)が指摘するように、「過去の出来事を表す「…ト」構文が用いられている場合には、文が従属節の主語の視点からの記述である」とすると、もっとも話者の視点を取りやすい「私」が従属節で現れるのはおかしくないだろう。しかし、久野(1978)のいう視点の寄り方が選択される接続助詞とどのように関わっているのかという問題が残っている。

一方、複文の節の中での主格選択の原則は次のように述べられている。

(16) 複文の節の中での主格選択の原則（野田・益岡・佐久間・田窪 2002：56）

原則1 動作を行うほうを主格にする

原則3 主文の主格に近いほうを主格にする。

例えば、次の例を見てみよう。

(17) 私に声をかけられた時、どう思う？ （野田・益岡・佐久間・田窪 2002：56）

(17) の従属節では、動作をするほうの「私」ではなく、動作を受けるほうの「あなた」が主格になっている。また、話し手に近いほうの「私」ではなく、話し手から遠いほうの「あなた」が主格になっている。それでも、(17) が自然な文であるのは、従属節の中の主格「あなた」が主節「どう思った」の主格「あなた」と同じで、節の中の主格選択の原則3に当てはまるからである。

野田・益岡・佐久間・田窪（2002）は、主格の選択の観点から、複文の節を3種類に分けている。

表1 主格から見た節の種類（野田・益岡・佐久間・田窪 2002：57）

節の種類	節の例
節の主格を主文の主格と一致させなければならない節	「～ながら」、「～まま」など
節の主格を主文の主格と一致させるのが普通の節	「～とき」、「～ために」など
節の主格を主文の主格と一致させなくてもよい節	「～けれど」、「～から」など

野田・益岡・佐久間・田窪（2002）の複文の従属節における主格の選択原則についての研究は、複文の従属節における主語の省略に関する研究にとって極めて示唆的である。例えば、表1で示された「～ながら」節や「～まま」節は節の主格を主節の主格と一致させなければならない節であるから、その主格が省略されるのがふつうである。一方、「～けれど」節や「～から」節は節の主格を主節の主格と一致させなくてもよい節であるから、その主格が主節主格と一致して省略されたり、主節主格と一致せずに、省略されたり、あるいは必要であったりすることが許容される。本稿の冒頭の例（1）や例（2）は表1に基づいてこのように説明されるのも可能である。しかし、野田・益岡・佐久間・田窪（2002）の研究を通して、主格の選択の原則はわかったが、主格の省略の条件、とりわけ主節の主格と非同一指示的な従属節の主格の省略条件はまだ明らかになっていない。

### 1.3 まとめ

以上、複文の従属節における主語の使用や省略についての先行研究を概観した。確かに、それぞれの先行研究を通して、複文における主語省略の条件はある程度確認できた。しかし、前述したように、まだ不十分、または不適切などところがある。特に主語省略の実態に言及している先行研究はほとんどないと思われる。本稿では、主語省略の条件を求めるには、主語省略の実態を考察しなければならないと考え、まず、複文の従属節における主語省略のパターンを考察する。その上で、主語省略の条件を求めたい。また、すべての種類の複文を考察対象にするならば、課題が巨大になるため、今回は、「カラ」節のみを考察対象にする。

## 2. 研究対象と研究方法

### 2.1 研究対象

本節では、従属節の種類と主語についての規定を明らかにする。

#### 2.1.1 従属節の種類

本稿では、複文や従属節の種類に関する規定は日本語記述文法研究会（編）（2008）に従う。複文とは、2つ以上の述語を持つ文である。1つの述語を中心としてまとまりを成す文の一部分は節で、複文は2つ以上の節からなりたった文である。従属節が主節に対して果たす役割によって、複文は副詞節、補足節、名詞修飾節、等位節・並列節という4種類に分かれる。副詞節とは、主節を副詞的に修飾する節のことである。例えば、(18a)では、「あいつとは小学校が違うから」は、主節の述語「知らん」を修飾している。副詞節には、意味的にさまざまなものがある。(18a)のような「～から・～ので・～ため」原因・理由節のほか、「～れば・～と・～たら・～なら」条件節、「～ため・よう(に)」目的節、「～ながら・～まま・ずに」様態節、「～とき・～前に/後で」時間節などがある。補足節とは、述語に対して主語や補語にあたる節のことである。例えば、(18b)では、述語「知っている」の目的語として働いている。補足節には、(18a)のような「～こと・～の」名詞節、「～と」引用節、「～か(どうか)」疑問節がある。名詞修飾節とは、名詞を修飾してその名詞について詳しく述べたり、名詞の指示対象を限定したりする節のことである。例えば、(18c)では、「弁当を食べ終えた」は「雪穂」を修飾する働きをしている。等位節・並列節とは主節と従属節が意味的に対等な関係にある節のことである。その中には、逆接や順接関係を表す等位節と節と節とを並べるために用いられる並列節が含まれる。(18d)は逆接関係を表す等位節であるが、(18e)は並列節の例である。

(18) a. そうか、秋吉はあいつとは小学校が違うから、あの事件のことは知らんのやな。

(『白夜行』)

- b. 彼はここではビールしか飲まないことを知っている。 (『白夜行』)
- c. 弁当を食べ終えた雪穂が、パッチワークの材料を取り出しながら、窓の外を見た。 (『白夜行』)
- d. 彼女のほうは何度か経験があるみたいだったけれど、あたしはあの時が初めて。 (『白夜行』)
- e. 日曜日は、映画を見たり、買い物をししたりした。 (筆者自作)

本稿は、複文の従属節としての理由・根拠を表す「カラ」節を研究対象にする。

### 2.1.2 主語の規定

先行研究では、複文における主語の省略に言及する場合、主語を主題と呼んだり、主格と呼んだりしている。本稿では、主語についての規定は、仁田（1997：166）に従う。すなわち、「《主語》とは、述語の表す動きや状態や関係を体現する主体として、文の表している事態（文の叙述内容である出来事や事柄）が、それを核として形成されている、といった事態の中心をなしている構成要素である」。しかし、仁田では、どのような要素が主語になりうるのかということをもまだ明らかにしていない。本稿は、仁田（1997）を参考にして、日本語の主語の特性を次のように規定する。

- (19) a. 属性文の主体
- b. 情意・感覚の主体
- c. 状態の主体
- d. 出現・生起・変化の主体
- e. 動きの主体（能動文は動作主で、受動文は被動者である）

ただし、形態的に係助詞「ハ」でマークされる主題は主語を兼務することも多く見られる。このような主題の機能をもつ主語、すなわち主題主語は、「主語」と呼ばれながら、主題の特性（例えば、主題連鎖<sup>4</sup>を形成することなど）が文構成に対する役割を果たすことを念頭において、その時は「主題主語」を短縮して、単に「主題」と呼ぶことにする。

## 2.2 研究方法

本節では、「カラ」節における主語省略の実態を考察し、「カラ」節における主語省略の条件を検討する。言語使用の実態については、小説『白夜行』や、『小説新潮別冊（Story Seller）』からのデータを集めて調査する。また、「だから」、「ですから」など副詞機能や連文を構成する機能をもつ接続詞は調査対象外とする。



### 3. 「カラ」節における主語省略の実態についての調査

複文の主節及び従属節において省略された主語が、いかなる要素と同一指示的かを観察すると、さまざまであることがわかる。本稿では、まず従属文において主語省略が生じるかどうかを調査する。またそれぞれの省略主語または非省略主語をそれらと同一指示になる要素が主節主題か、主節補語か、先行話題<sup>5</sup>か、発話者かなどによって分類した。その結果を表2に示す。

表2 「カラ」節での主語省略の分布

同一指示 対象	主節主題	主節補語	先行話題	話し手/聞き手	一致要素なし	合計
主語省略	47	1 (? <sup>6</sup> )	10	19	2	79
主語非省略	1 (? <sup>7</sup> )	0	2	6	29	38
合計	48	1	12	25	31	117

表2で示されるように、「カラ」節は117例のうち79例(67.52%)は主語が省略され、38例(32.48%)は主語が省略されていないのがわかる。また、省略された主語の内訳は、「主節主題一致」型主語省略は47例(59.5%)、「主節補語一致」型主語省略は1例(1.3%)、「先行話題一致」型主語省略は10例(12.7%)、「話し手/聞き手一致」型主語省略は19例(24.1%)、「一致要素なし」型主語省略は2例(2.5%)である。一方、省略されていない主語の内訳は、「主節主題一致」型主語非省略は1例(2.6%)、「主節補語一致」型主語非省略は0例(0.0%)、「先行話題一致」型主語非省略は2例(5.3%)、「話し手/聞き手一致」型主語非省略は6例(15.8%)、「一致要素なし」型主語非省略は29例(76.3%)である。

以上の数字から次のことが分かる。すなわち、「カラ」節内の主語省略は、非省略に比べて、数が圧倒的に多い。そして、省略の場合、省略された主語の指示対象が主節主題の指示対象と同一指示になるケースと、話し手/聞き手と同一指示になるケースが多い。一方、非省略の場合、一致要素が見つけられないパターンが圧倒的である。では、主語省略と主語非省略のそれぞれのパターンを見てみよう。

#### 3.1 「主節主題一致」型主語省略と非省略

表2から分かるように、「主節主題一致」省略は46例ある。次の(20)、(21)、(22)を見てみよう。

(20) そうか、秋吉<sub>i</sub>は〔 $\phi_i$  あいつとは小学校が違うから〕、あの事件のことは知らんの

やな。

（『白夜行』）

(21) あの二人<sub>i</sub>は〔 $\phi_i$ おまえらが気に入ったみたいやから〕、もしかしたらまたお呼びがかかるかもしれん。  
（『白夜行』）

(22) あの子<sub>i</sub>は〔 $\phi_i$ 音楽部の部長をしてたから〕、いつも居残りをして…

（『白夜行』）

(20) では、従属節「 $\phi_i$  あいつとは小学校が違う」における省略された主語 $\phi_i$ の指示対象が全文の主題、すなわち主節主題「秋吉」と一致するから、従属節で明示されなくてもよいため省略されている。(21)と(22)も(20)と同じ理由で、従属節の主語が省略されている。

では、なぜ主節主題と一致するから省略できるのかというと、まさに主題の働きそのものに関係するだろう。主題の働きについて、三上(1960)は「ハ」のピリオド越え機能とコンマ越え機能を提唱した。ピリオド越えとは、「Xハ」がピリオド（マル、句点）を越えて、次の文まで及んでいくということである（三上 1960:117）。例えば、(23)では、「父ハ」が句点を越えて、次の文「隣リノ間ニ座ツタ」まで及んでいくことが主題「父ハ」のピリオド越え機能である。

(23) 父<sub>i</sub>ハ茶ノ間ヘハハイラナカッタ。 $\phi_i$ 隣リノ間ニ座ツタ。 （三上 1960:117）

一方、複文では、「普通「Xハ」は途中の副次句（本稿でいう従属節）を飛ばして、文末の主要句（本稿でいう主節）に係るものである。そうであるのに、通りがけに途中の動詞にも軽く係る、そのことを結果からコンマ越えといったのである」（三上 1960:130）。例えば、(24)では、「東京は」は途中の「勤勉な人がたくさんいて、一生けんめい働いているのだが」を飛ばして、文末の「町も汚いし、道も汚い」に係るが、「東京に勤勉な人がたくさんいる」のように、従属節にも軽く係っている。

(24) 東京は勤勉な人がたくさんいて、一生けんめい働いているのだが、町も汚いし、道も汚い。  
（三上 1960:131）

(20)、(21)、(22)もこのように「ハ」のコンマ越えで説明することができる。また、言語類型論では、日本語のような主題優勢的言語では、主題連鎖の作用で、省略が生じると言われている。しかし、三上(1960)などの説明は主題の機能を明らかにしているものの、なぜピリオド/コンマ越え、主題連鎖が生じるのかについては、特に検討されていない。本稿では、付(2012)に従う。付(2012)によれば、「「Xは…(Xが)…」文型（本稿でいう「主節主題一致」型主語省略）において、主題を表す「ハ」の関与によって、話者の視点が常に「X」寄

りになる。すなわち、視点関係は、 $I=E$  (話者)  $\geq E$  (X) である。「視点の一貫性」の原則によると、従属節でもその視点が「X」に寄ることになる。つまり、「X は…… (X が) ……」は普遍的適用性を持っている」とされている。

では、「主節主題一致」ならば、絶対に省略されるのかということ、実は必ずしもそうではない。次の「主節主題一致」型主語非省略の例を考えてみよう。

- (25) 「彼女の美しさには一成も目を見張っていたから」、この申し出に彼は有頂天になった。  
(『白夜行』)

(25) は、従属節の主語の指示対象が主節主語の指示対象と一致するという普通の有り様ではなく、主節主語の指示対象が従属節の指示対象と一致することに注意しておきたい。すなわち、「一成」が主語として従属節で出てきて、後に来る主節において、主題として働くためその代用形「彼」を使っているということである。では、なぜ従属節で「一成」が省略されないのかを検討する。まず、先行文脈を観察しよう。

- (26) ①店の隅にあるソファに座り、一成は江利子の髪が切られるのを待つことにした。

…

そして――。

②倉橋香苗は、彼が選んだ女ではなく、彼を選んだ女だった。清華女子大の部員の中でも、一年生の時から彼女は際立って美しかった。新入部員にとっての最初の発表会で、誰が彼女のパートナーになるか、男子部員の最も関心のあることだったが、ある日彼女のほうから一成にいつてきたのだ。自分をパートナーに選んでほしい、と。

③彼女の美しさには一成も目を見張っていたから、この申し出に彼は有頂天になった。そしてコンビを組んで練習を重ねるうち、即座に恋愛関係に陥った。

(『白夜行』)

下線を引いた部分は (25) の文である。(26) から、まず (25) は前の段落の中ではなく、自ら段落を開始する文であることが分かる。また、最初の段落①では、「一成」を主題として叙述しているが、次の②では主題が「倉橋香苗は」に変化した。②を受けて③では主題がまた「一成」になる。このように主題上の視点が変換する際に、登場人物を明示しないと、人物関係が混乱してしまうことになる場合があるだろう。さらに、①は主観的述語「…ことにする」を使っていることから分かるように、(26) は「一成」の視点で物事を述べている<sup>8</sup>。しかし、③における「一成も」は①の「一成」ではなく、①の「一成」の記憶の中の第三者としての「一成」である。そして、「一成も」は他の「男子部員」と比較して当時の一成の立場を表すことがで

きる。つまり、(26)では、視点関係は「I=E（話者）≥E（一成）>E（彼>一成）≥E（倉橋香苗）」になる。この場合、(25)で「一成」を明示することは、客観的な叙述として必要になる。この点から言うと、(25)の従属節における「一成」は一致要素がないから省略されていない。つまり、(25)は「一致要素なし」型主語非省略の例として適切である。

### 3.2 「主節補語一致」型主語省略と非省略

「主節補語一致」型主語省略は今回の観察の限り、次の(27)しか見られなかった。そして、「主節補語一致」型主語非省略は一例もなかった。では、(27)を見てみよう。

(27) [φ<sub>i</sub>派遣社員だから]、当然職場の名簿にも彼女<sub>i</sub>の名前は載っていない。

（『白夜行』）

(27)は一見、φ<sub>i</sub>は主節補語「彼女」と一致するように見えるが、先行文脈を見れば、先行話題と同一指示になることが分かる。

(28) ①誠は、どうにかして三沢千都留に連絡をとれないものかと思案していた。②彼女が今夜、品川のホテルに泊まることはわかっている。③だから、いざとなったら訪ねていけばいいのだが、なるべくなら昼間のうちに会い、自分の本心を打ち明けてしまいたかった。

④しかし連絡をとる手段が見つからなかった。⑤個人的な付き合いを全くしていなかったから、電話番号も住所も知らない。⑥派遣社員だから、当然職場の名簿にも彼女の名前は載っていない。

（『白夜行』）

下線部は(27)である。(28)の冒頭文①は主観的述語「思案していた」を使っていることから、その主語「誠」の視点からの叙述であることが分かる。そして、誠の視点から「三沢千都留」のことを述べている。この場合、「三沢千都留」が省略されるのが普通である。このことがなぜ(27)（=⑥）で従属節の主語が省略されているのかの理由である。では、なぜ(27)の主節補語として「彼女」が現れるのかということが問題になる。本稿では、この「彼女」は明示されなくてもよいのであるが、明示したほうがわかりやすいということが非省略の理由であると思われる。

一方、「主節補語一致」型非省略は一例もなかった。実は、強いて言えば、先の例(25)は「主節補語一致」型非省略の例に見えるかもしれないが、前述したように、これを「一致要素なし」型主語非省略の例として扱う。

### 3.3 「先行話題一致」型主語省略と非省略

「先行話題一致」型主語省略は10例ある。次の例を見てみよう。

(29) 誠<sub>j</sub>は目をそらし、コーヒークップを口元に運んだ。篠塚の笑顔が、何となく眩しかった。

…

昨夜、家に帰ってから篠塚に電話したのだった。〔 $\phi_j$ 電話では話しにくい相談事があるとあったから〕、篠塚<sub>i</sub>も心配したのだろう。

『白夜行』

(30) しかも、〔 $\phi_j$ その日にかぎって大金を持ってたから〕、顔見知りやないかと疑ってみたいやな。『白夜行』

(31) 〔 $\phi_j$ 老後を二人で暮らすのには広すぎる家だったから〕、細かいことを気にかけなければ、結果オーライだったのかもしれない。『首折男の周辺』

(29) では、 $\phi_j$ は先行文脈の話題「誠」と一致する。(30)では、 $\phi_j$ は話題人物「桐原の父親」である。(31)では、 $\phi_j$ は先行文脈の話題「売られてしまった前の家」である。先行文脈の話題と一致する主語の省略は、談話レベルの現象なので、本稿では深く検討することはしない。ただし、注意しておきたいのは、(29)では、主節主題は、省略された従属節主語と一致しないために、従属節の後の主節主語として明示されているということである。もし、(29)を(32)のように形を変え、「篠塚」を文の先頭に置けば、不自然になるだろう。従って、従属節における主語の指示対象が主節主題の指示対象と一致しない場合、主節主題が文の先頭に来ることは少ないと考えられる。

(32) \*篠塚<sub>i</sub>も〔 $\phi_j$ 電話では話しにくい相談事があるとあったから〕、心配したのだろう。

しかし、その逆は成り立たない。例えば、(33)は、「カラ」節の主語 $\phi_i$ は主節主題「あの子」と一致するため省略されている例である。この場合では、主節主題「あの子」が文全体の先頭にくる(33a)も、従属節の後、主節の前にくる(33b)も適切な文である。

(33) a. あの子<sub>i</sub>は〔 $\phi_i$ ずっと私みたいな年寄りと一緒に生活していますから〕、最近の女の子らしい澁刺としたところが少ないんじゃないかとかね。『白夜行』

b. 〔 $\phi_i$ ずっと私みたいな年寄りと一緒に生活していますから〕、あの子<sub>i</sub>は最近の女の子らしい澁刺としたところが少ないんじゃないかとかね。(筆者一部変更)

一方、「先行話題一致」型主語非省略は2例あった。それぞれを見てみよう。

- (34) ①伝票に金額と送金先の口座を記入して、事務集中課の係長<sub>j</sub>と課長<sub>i</sub>の印を押せばいいわけ。②課長<sub>i</sub>は席を立っていることが多いから、無断で判子を使うのは難しくない。 (『白夜行』)
- (35) 雪穂<sub>j</sub>が何ひとついい返してこないから、喧嘩にならないのだ。 (『白夜行』)

(34) では、従属節の主語が「課長」で、明示されている。その理由は、①で現れる登場人物には、「係長」と「課長」の二人がいて、しかも対等な役割を担っている。紛らわしさを避けるには、明示するほかないのである。(35) では、従属節主語「雪穂」は、先行文脈ですでに登場しているが、(35)の発話の出現まで、「誠」の行為の叙述に一段落そしてさらに3文という相当な紙幅を費やしているため、再び「雪穂」に注意を払うには、それを明示するのが普通である。

以上の考察から、「先行話題一致」型主語省略の条件が分かる。即ち、普通、従属節の主語が先行話題と同一指示になればその主語を省略できるが、紛らわしさを避ける場合とか、その主語に注意を払うといったような場合では省略できない。

### 3.4 「話し手/聞き手一致」型主語省略と非省略

「話し手/聞き手一致」型主語省略も数多く見られる。次の例を見てみよう。

- (36) [φ<sub>i</sub>すぐに食べられるものを買ってきたから]、φ<sub>j</sub>そんなに待たなくてもいいわよ。 (『白夜行』)
- (37) 待ったさ。飽き飽きするぐらいね。インスタントラーメンでも食おうかと思っていたところさ。[φ<sub>i</sub>だけど結局出来合いの惣菜を食べさせられるわけだから]、大した違いはなかったということだ。 (『白夜行』)
- (38) [φ<sub>i</sub>遅いから]、φ<sub>j</sub>様子を見に来たの。 (『白夜行』)

(36) では、φ<sub>i</sub>の指示対象は話し手で、φ<sub>j</sub>の指示対象は聞き手である。(37) では、φ<sub>i</sub>の指示対象は話し手である。(38) では、φ<sub>i</sub>の指示対象は聞き手で、φ<sub>j</sub>の指示対象は話し手である。

「話し手/聞き手一致」型主語省略は、発話場面で、動作の主体が容易に分かるから生じる省略現象である。小説では、話し手と聞き手が会話をすることが多いので、「話し手/聞き手一致」型主語省略が多く見られるのも不思議なことではない。

一方、「話し手/聞き手一致」型主語非省略の例は数が少ない。次の例を見てみよう。

- (39) 金曜日に桐原が来たかと訊いた時、最初文代は来てないと答えそうな気配やった。ところが雪穂が横からプリンのことをいうたので、仕方なく本当のことをしゃべったという感じやった。雪穂にしても、ほんまは桐原が来たことを隠したかったんやないやろか。けど、「俺がプリンの包装紙に気づいたから」、嘘をつくのはかえってまづいと考えたんと違うかな。 (『白夜行』)
- (40) 今のおかあさんはおとうさんのほうの親戚で、「あたし、昔から時々一人でここへ遊びに来ていたから」、あたしのことをすごくかわいがってくれてたの。 (『白夜行』)
- (41) 決して誰にもいいません。そんな噂が流れ始めても、あたしたちさえ否定したら済むことですから。藤村さんに伝えてください。「あたしたちが絶対に守ってみせるから」、安心してくださいって。 (『白夜行』)

(39) では、従属節「俺がプリンの包装紙に気づいた」において、「俺が」は従属節が表す事柄を構成するためになくしてはならない情報として働く、すなわち、焦点情報の一つである。(40) では、「今のおかあさん」は先行文脈の主題である。「あたし」がなければ、「昔から時々一人でここへ遊びに来ていた」のは「今のおかあさん」と間違えることがあるだろう。(41) では、自己意思を主張するため従属節で「あたしたちが」を省略していないと考えられる。

### 3.5 「一致要素なし」型主語省略と非省略

調査では、従属節における主語省略のパターンには、「一致要素」が見つけれないものが見られる。本稿では、このようなパターンを「一致要素なし」型主語省略と名づける。しかし、このような主語省略は数が少なく、2例しかなかった。一方、このようなパターンの主語非省略の例は圧倒的に多い。では、それぞれの例を検討しよう。

まず、主語省略の例を見てみよう。

- (42) [ $\phi_i$ 今夜は朝まで面白そうな映画をやってるから]、それを見てるわ。(『白夜行』)
- (43) そうなると、 [ $\phi_i$ 外から侵入することもできるわけだから]、もっと厄介な事件も起きるかもしれない。(『白夜行』)

(42) でも(43)でも述語の主体がないのに適切である。なぜかという、明示しなくても理解に何の影響もないからである。例えば、(42)では、主体を明示しなくても「映画館」であることが分かるだろう。(43)では、具体的な主体を挙げるのが難しいが、「人」や「誰か」であることが分かるだろう。

次に、主語非省略の例を見てみよう。

- (44) [女たち<sub>i</sub>も誘おうとはしなかったから]、それは最初から決められていたことだったのだろう。 (『白夜行』)
- (45) [あの部屋の台所には換気扇<sub>i</sub>がついてなかったから]、炊事をする時には窓を開けるのがふつうやないかというわけや。 (『白夜行』)
- (46) [この中に帳簿と、前年度分の領収書<sub>i</sub>が全部入ってるから]、日付と金額を書いて、月別に計算しておいてほしいの。 (『白夜行』)

(44)、(45)、(46)では、それぞれの従属節における主語「女たち<sub>i</sub>」、「換気扇<sub>i</sub>」、「領収書<sub>i</sub>」は、先行文脈での一致要素がなく、全くの新情報として事柄を構成している。従って、省略されると、意味不明になる。

#### 4. 結論と今後の課題

以上、本稿は「カラ」節を対象として、従属節における主語省略を「主節主題一致」型、「主節補語一致」型、「先行話題一致」型、「話し手/聞き手一致」型、「一致要素なし」型主語省略という5パターンに分けて、それぞれの省略条件を検討した。「カラ」節での主語省略の分布について検討した結果は、次の表3で表すことができる。

同一指示 対象	主節主題	主節補語	先行話題	話し手/聞き手	一致要素なし	合計
主語省略	47	0	11	19	2	79
主語非省略	0	0	2	6	30	38
合計	47	0	13	25	32	117

表3 「カラ」節での主語省略の分布（表2の修正）

結局、従属節における主語の指示対象は、文脈によって、視点が置きやすい主題や話題の指示対象と同一指示になると、省略されやすい。一方、従属節における主語は新情報または焦点情報の一部であれば、省略されにくい。また、その主語がなければ、紛らわしさを招くことがあるので、そのような場合では、その主語は省略されにくい。

しかしながら、複文における主語の省略条件全般についての研究としてはまだまだ不十分である。今後、本稿で観察した主語省略のパターンがいかに他の種類の複文で分布するのか、それぞれの省略条件は何かということについて考察していきたい。



## 〈注〉

- 1) 本稿でいう主語についての規定は、後述するように、仁田（1997）に従う。
- 2) 野田・増岡・佐久間・田窪(2002)で問題とされる「主格」は、「～が」という形で表される格成分で、「～を」で表される対格や、「～に」で表される与格と対立している。野田・増岡・佐久間・田窪(2002)は主格を主語(subject)の同一概念として捉えているが、主格が主題になる例もある。しかし、そのような場合でも、主格を兼務する主題を主格として問題にしている。
- 3) 視点とは、文の命題で述べられている事象を観察し記述しているカメラアングルの位置あるいはその位置にいる人物である。視点を一次的に表す一手段として、「共感 (Empathy) 度」があげられる。久野（1978：134）によると、「共感とは文中の名詞句の指示対象  $x$  に対する話者の自己同一視化のことである。その度合い、即ち共感度を  $E(x)$  で表す。久野（1978）は一般原理として視点の一貫性を提唱している。視点の一貫性とは「単一の文は、共感度関係に論理的矛盾を含んでいてはいけない」（久野（1978：136））ということである。
- 4) 日本語や中国語のような主題優勢的言語（Tsao 1977）では、ある文の主題がその前の文の主題と一致することを理由に、その主題が省略されることがある。このような現象は、主題連鎖と呼ばれる。
- 5) 本稿では、話題を主題と区別して使う。主題は、文レベルの概念である一方、話題はより広い意味を持ち、談話を展開する時に使う概念である。つまり、主題は文中で「は」を伴って明らかに指し示されているが、話題はある命題形式や先行文脈で焦点となるものなど、いろいろな形式で表される可能性がある。
- 6) 省略パターンが一見「主節補語一致」のように見えるが、検討するとそうではないものに「？」をつける。
- 7) 非省略パターンが一見「主節主題一致」のように見えるが、検討するとそうではないものに「？」をつける。
- 8) 久野（1978：196）が主張する「主観表現の経験主体制約」によると、「内部感情を表す主観表現は、話者がその感情の経験主体寄りの視点をとった時のみ用いられ得る」とされる。

## 例文出典

東野圭吾（2002）『白夜行』集英社文庫。

伊坂幸太郎（2012）「首折男の周辺」小説新潮別冊。Story Seller。新潮社。

## 参考文献

久野 暉（1978）『談話の文法』大修館書店。

澤田治美（1993）『視点と主観性 — 日英語助動詞の分析 — 』ひつじ書房。

成山重子（2009）『日本語の省略がわかる本』明治書院。

日本語記述文法研究会（編）（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版。

仁田義雄（1997）『日本語文法研究序説』くろしお出版。

野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則（2002）『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店。

付改革（2012）「日本語の複文における主語省略の条件について — 省略要素の同定を中心に — 」

複文の従属節における主語省略について（付改華）

『言語の普遍性と個別性』 No.3，新潟大学現代社会文化研究科，pp.99-125.

益岡隆志（1997）『複文』くろしお出版.

三上 章（1960）『象は鼻が長い』くろしお出版.

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店.

Huang,C.-T.J.(1984)“On the Distribution and Reference of Empty Pronouns”, *Linguistic Inquiry*15,531-574.

Tsao,F.（1977）*A Functional Study of Topic in Chinese:The First Step toward Discourse Analysis*,Doctoral  
Dissertation, USC, Los Angeles, California.

主指導教員（福田一雄教授）、副指導教員（秋孝道准教授・大竹芳夫准教授）